

---

# 24th Summer Breeze

小松絵美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

24th Summer Breeze

### 【Zコード】

Z3600D

### 【作者名】

小松絵美

### 【あらすじ】

別れた恋人が忘れられないサーファーRIEは、メールアドレスを変えて自分だとわからないように、彼に一方通行のメールを送る。そんなある日、RIEの元にも見知らぬサーファーからの一方通行のメールが送られてくるが、その内容はRIEが別れた恋人に送つたものと同じだった。いったい、このメールの送り主は・・・

## 第1話 私からのメール？

もう、あれから何年経ったのだろう。

あれからといつのは、ケンジが夢をあきらめた夏。  
そして、ケンジが波をおいた夏。

ケンジとの恋が終わりを告げてから、ずいぶんと時が経つてしまつた。

「さよなら」を告げたのは私の方だった。

プロサーファーになる夢を追いかけて、湘南に移住してから6年が経つたころだつた。

今、振り返つてみても、あんなに傷つけ合つて、でもあんなに愛した人にはもうめぐつ合えないだらうと思つ。

別れてからもずっと、ケンジのことをしている私がいることを、ケンジは知らない。

私は、自分でも（なんてネクラなことを・・・）と思ひながらも、年に一度だけは、ケンジの携帯に電話をしていた。

「はい」というケンジの声を聞いて、携帯番号があのまま変わつていないと確認した。

私は、そのたびにわざわざ携帯を非通知設定にしてかけていた。ケンジの声。変わらないちょっとぶつきりぽつな投げやりな感じのする声。

私が、さよならを告げてからも変わらぬケンジへの想い、そして、

ケンジにも

そうであつて欲しいという願いが、ケンジの携帯番号が変わらないことを

自分なりに確認して、安心していたのかもしれない。

私は、自分のメールアドレスを変えた。

ケンジと別れてから。

そして、これもまた年に一度くらいケンジにメールを送っていた。  
「最近調子はどうですか？今週は伊豆の大浜あたりにいい波が

きそうだよ！」

波乗りをやめてしまつたケンジには、どうでもいいメールだった。  
おまけに知らないメールアドレスだ。

文章からいつて、サーファーだと察しがつく。

でも、まさか私からだとは思わないだろう。

ケンジの知つている私のメールアドレスは「rie.lani.always.you」。

そして、私の今のメールアドレスは「always.wide.open.hawaii.nalu」だった。

英語とハワイ語をミックスさせて作つたアドレス。

男のものか女のものかもわからない。

でも、きっとサーファーだろうと思わせるようなアドレス。

それだけで、知らない人からのメールでも気味悪さは半減していることだろう。

勝手にそう思つていた。

こんなことを続けて、私はどうしたいとこうのだろう。

共通の友達から何気なく聞いた話だが、ずっとケンジは私の話や海の話になると

ブルーな感じになるらしい。

いつそのこと、誰だかわからない私からのメールで、「メル友」と

いうだけで

楽しんでくれたらなんて思つてしまつ。

それが私だと知つたときは、ますます取り返しのつかないことになりそうだが。

私だつたらどうだろ？。

見ず知らずの人からのメール。

男か女かもわからない正体不明の送り主。

でも、「サーフィン」という共通の話題があつたら、メールの上だけでも

楽しんでもらうかも知れない。

絶対に会つこがないからと「安心感から、何を書いてもいい」という自由な

メール。自分をかなり良く見せることもできれば、お互いが知らない人だから

こそ、核心にせまつた話もできるかもしねり。

ふとした瞬間に、ケンジがまだ私のことを引きずつて「うう」とが聞きた

いのかもしれない。いや、「ううんでいる」ということを聞くかもしれない。

でも、私は別れるときに（ケンジの記憶に私がずっと残るなり、うらんでいても

いいから、お願ひ忘れないで。）と思つた。

どつちにしる、私の知りたいことが聞けるチャンスになるような気がして、いた。

金曜日の夜だつた。

残業を終えて疲れて帰つてきた私は、そのまま着替えてベッドに倒れこみたい

気分だつたが、一週間の疲れをとるべく、バスタブにお湯を入れて

のんびりと

疲れを癒すことにした。

いつもよりかなり長い入浴を終えて、バスタオルをカラダに巻きつけたまま

部屋に戻ると、携帯電話のランプが光っていた。

「1件のメールが届いています」

私はメールを見た。知らないアドレスからだつた。

「調子はどう？今週は伊豆の大浜あたりに、いい波がきそうだよ！」

私はメールを読んで全身に鳥肌がたつた。

誰？見知らぬアドレス。それに、私がケンジに送ったものとほとんど内容が

一緒だつた。

もしかしてケンジ？そんなわけはない。ケンジのアドレスはこれじやない。

でも、内容からいつてサーファーなことは察しがつく。

私はとても怖くなつて、そのメールを削除した。

それと同時に、ケンジもきっとこんな気持ちで誰だかわからない、（けれど本当は私が送っている）メールを削除しているのだと思つた。

気味が悪いと思いながら。

次の朝、私は目が覚めるとすぐにメールの受信を確認した。

受信メール0件。

やはり、單なるいたずらか？それとも誰かと間違えて送られたメールなのだろうか？

間違えて送られていたなら、きっと送り主も困るだろう。

今週はどこかのスポットでサーフィンをするかのメールだつたに違ひない。

「送り先のアドレス、間違っていますよ」と親切なメールを送る」とも、

もう削除してしまった私にはできない。

送り主は相手にメールをスルーされてしまったと思っているだろ？。  
でも、間違えて送ったのは送り主のほうだ。

別に、私が申し訳ないような気になることもない。

実際、昨晩は怖くて気味が悪くて削除してしまったのだから。

しかし、夜になって、また昨晩と同じようなメールがやつてきた。  
「どこにする？今週は大浜でいい？メール見たら返事ちようだい！」

これは、いたずらメールではないのか？

完全にアドレスを間違えて送っている。

私は、同じサーファーとして、仲間と合流できないかもしれないそ  
の人を

少しかわいそうに思い、今日は親切心から「アドレス間違えていま  
せんか？」と  
メールを返信してみることにした。

「どちらにメールをお送りですか？間違えていませんか？」

ちょっと冷たい感じのする文章だったが、あえてフレンドリーにす  
る必要も

意味もない。私は、それだけを送つて返事を待つた。

「間違えました！」というメールが届くに違いない。

そして、携帯のメール受信のメロディが鳴った。

開けてみると、「間違えてませんよ！」それだけだった。

そんなわけはない。私は、送り主のアドレスを知らない・・・と思  
つたところで

私は送り主のアドレスを見てハッとした。

「always-wide-open-hawaii-mail」

私のアドレスと一緒にだった。違うのは「・」か「・」かだけだった。  
ところとは・・・やはりいたずら？

いや、絶対にいたずらだろ？ 私は、いたずらだとわかると、やっぱり気味が悪くなってきた。

どうしよう？ 返信するべきか？ でも、このアドレスでは、相手も私のことを

男か女かわからないだろ？

自分と同じアドレスだから、きっとカーファーに違いないとでも思つたか？

でも、それなら何のために？

私は一応、私なりの理由があつてケンジにメールをしていたが、いつたいこの人は何がしたいのだろう？

寂しいから？ それとも暇つぶし？

私は「あなたはサーファーですか？」と送つてみた。すると返事はなかつた。

次の日は、もちろん私は伊豆には行かず、いつもの茨城のポイントに入った。

そして、夜になつてもメールの受信はなく、次の日の朝になつてもメールは来ていなかつた。

そして、次の日も。またその次の日も。

何か悪いことでもしてしまつたのか？ それとも怒らせてしまつた？

そんな訳はない。もとほと言えば、いたずらで送られてきたメールだ。

怒らせてしまつたとしても、私は悪くない。

それとも傷つけてしまつた？ や、傷つけたとしても私は悪くないだろう。

いきなり勝手に送られてきたのだから。

どこの誰かかもわからないのに・・・  
(どこの誰か?)

伊豆に行いつとこつのだから、「北」にこつのはせんなんに遠くはないかも

しない・・・

その人は、伊豆で友達と会えたのか？

でも、なぜ「間違えていない」などと断言したのだろう？

それとも、私のことを本当に知っている人なのか？

気がつくと、私は誰だかわからない私と同じメールアドレスの人からのメールを待っていた。

そして次の週末、またメールがやつて來た。

「先週、読みどおり、やっぱり大浜よかつたよ！今週はどうじょ？ 寒くなってきたから、そろそろ茨城は無理かもね」

どういうつもりだらう？

先週「サーファーですか？」とメールしたら返事をくれなかつたくせに。

私も、このままメールを送るのをやめようか。

そもそも、返事をする意味もない。

私は、意味のないことに一週間も（悪いことしたかな）と思ついたことを

後悔した。ばかばかしい。知らない人相手にメールなんかまともに返して、

どういう人だと思われたか。これでは、出逢い系サイトと何の変わりもない。

すると、またメールが来た。

「もう、メールくれないの？」

いつたいこの人は何がしたいのだろう？ そのうち会つ約束でもしてくるの

だらうか？そんな会つたこともない人にメールで会つ約束をするほど、私は好奇心もなければ暇もない。

私は、相手にするのをやめようと思つて、メールを削除しようとした。

すると、またメール受信。

「削除しようとしてるでしょ？会おうなんて言わないから返信してくれる？」

なんなの、この人は。男か女かもお互いわからない。そして年齢も、もちろん

顔も。でも、送られてくる文章は、そのとき私が考えていたことをズバリ的を得ていた。すると今度は、

「オレはサーファーです。あなたもだよね？」

もちろん返信しなかつた。

「今週は鴨川の方へ行こうと思つています。」

「どこの板乗つてるの？」ロットの板かなりいいよー。」

「君はレギュラー？」

立て続けにメールが来たけれど、ますます私は返信ができなくなつていった。

返信してしまつたら、本当に出逢い系サイトのようなものをやつてしまふような気がになつてしまいそうだからだ。

サーファーという連帯意識からくる独特的の安心感は確かにある。

でも、私が返事をする義務はない。

こんな人からのメールを一週間も待つていたなんて、自分でばかばかしくなつてしまふ。

しかし、次に来たメールで私は一瞬にして気持ちが変わつた。

「君さあ・・・RIEでしょう？」

えつ？やつぱり私のこと知つているの？

それなら、あなたは誰なの？

もしかしてケンジ？

そんな訳はない。ケンジは知らない人にこんなメールを送る人ではない。

少なくとも、私の知つているかつてのケンジであれば。  
でも、私の胸は高鳴りを抑えることができなかつた。

そしてついに私はメールの返事を送つた。

「R I E ジゃないです。あなたは誰ですか？自分のことを何も言わ  
ないで

失礼じやないですか？」

嘘だつた。私はR I E だ。心のどこかで、この送り主がケンジであるように  
と願つた。本当にケンジだつた場合、私が私だということを知られ  
ていな

方が都合がいい。

「オレが誰だか知りたかつたら、週末鴨川のグランドホテル前に来  
れば

いいよ。そしたら、オレが誰だかわかるから。」

私は一瞬、今週は鴨川に入るかー！と思つてしまつた。

しかし、すぐそのひらめきを頭から消した。

ばかばかしい。ケンジでないなら別に誰でもいい。

でも、どうして私のことを知つているのだろう？

もしかしたら、本当にケンジ？

私は、眞実を確かめるべきか、このままを続けるかで朝まで眠れず  
に悩んだ。



## 第2話 一人のケンジ

私は、その週も見知らぬサーファーからメールで指定された場所・・鴨川グランドホテル前へは行かなかつた。

誰だか知りたい・・本当にケンジだつたらと思いながらも、ケンジの性格からいつてそれはないだろうという確信があつた。

このまま、誰だかわからない人とのメールを続けることは、なんの意味もないことも頭ではわかっている。けれど、心の奥でどうしても、本当に見知らぬ人だとは思えなかつた。

私と同じメールアドレス。私の名前まで知つていて。気がつくと、私はメールの送り主のことを考えている時間がとても多くなつていた。

やつぱり誰なのか確かめてみたい。

もし、ケンジなのであれば、どうしてこんなに回りくどいやり方をするのかわからない。

別れた恋人というのは、なかなか普通の友達に戻ることは難しいと思う。

どちらかに、恋心が残つていた場合、すでにどちらかに新しい恋人がいるのであれば、それこそ三角関係の泥沼になつてしまふだろう。

お互ひが新しい恋人ができて幸せに暮らしていく、それでも友達として再会したいという気持ちのタイミングが合わないと、別れてもお友達で・・などといつキレイな関係にはなれないだろう。

私は、思い切ってメールを送つてみた。

何日も考えた挙げ句、結局私がいちばん聞きたかったこと・・・「あなたはケンジですか？」と文字を入れ、目をつぶりながら深呼吸をして両手で送信ボタンを押した。

「はい。ケンジです。」

私は送られてきたメールを見て愕然とした。

そんなわけはない。この人は私が「ケンジ」という名前を出してしまったことをいいことに、その名前を利用しているだけなのだ。

「いたずらはやめてください。」

私がバカだった。相手にあえて自分から素性を明かすようなことをしてしまった。震えがくるほど後悔した。すると、メールが届いた。「怒っていますか？」

これは、どういう意味だろ？ やっぱりケンジという名前を私が出したから茶化されてしまったのだ。

「いたずらはやめください。怒っています。もうメールもしないでください。削除します。」

私は、それだけを送つて削除しようとした。

すると「待つて！」というメール。

続いて「俺は本当にケンジですが、あなたのケンジは杉原ケンジですよね。」

杉原ケンジ・・・ケンジの名前だ。

やっぱり、この人はケンジを知っている。そして私のことも。かすかな記憶を辿つても、私はケンジ以外の

もう一人のケンジという存在を思い出すことができない。なんて返信をすればいいのか。私はこの前のメールで、自分のことをRIEではないと嘘をついてしまった。しかし、あのときは仕方がない。

どこの誰かもわからなかつたのだから。でも、このケンジは本当に私のこともケンジのことも知つていた。

「杉原ケンジとはお知り合いでですか？私の知り合いでケンジがどうして杉原ケンジだとわかるのですか？」

すると、30分ほど時間があいて次のメールが送られてきた。

「あなたは、下北沢にある聖明学園に通つていましたよね。」

やつぱり、私のことを知つてゐる。それも20年近く前の私のことを。  
「だつたらどうなんですか？私は下北沢の高校には・・・」と文字を打ちかけてやめた。

こんなところで嘘をついてもしょうがない。

実際この見知らぬケンジは、この何日かの間私にメールを一方的に送つてきたが、別にひどいことをされたわけではなかつた。私は、もうここからは正直になろうと心を決めた。

それでもしないと、何も始まらないし終わらないこともわかつていた。

「はい。そうです。やつぱり、私のことを知つてゐるんですね。」

「一方的に知つていいだけです。高校生の頃、下北沢のホームにキーホルダーを落としましたよね。」

私は一瞬にして、そのときの光景を思い出した。

あれは、夏休みが始まる直前の期末試験の期間中だつた。いつもなら学生がいない時間・・・お昼すぎくらいに、どの学校も同じ時期に試験があるので、その口は駅のホームに学生が溢れかえつっていたのだ。

そんな中、私の学生カバンが誰かのものとぶつかってカバンにつけていたサーフボード型のキー ホルダーがはずれてホームに落ちてしまったのだった。

そのとき、一人の男子高校生がいきなりホームに降りて拾ってくれたことがあった。

でも、一瞬の出来事で私は顔も覚えていない。彼も・・・この人も私の顔など覚えていないくらいの一瞬のことだったはずだ。交わした言葉は「ありがとうございます」だけ。あまりの短い時間に私は電車が来るかも知れなかつたそのときのことを心配する余裕もなかつた。

このメールの相手は、あのときの人というのか。それなら、そのあと一度も会ったことがないはず・・・はずというのは、会ったことがあるのであれば、とっくにこの話が出ていてもおかしくないと思つたからだ。

その人がどうしてケンジの名前と私を知つているのか。そして、メールアドレスも。

「はい。もしかして、あのとき拾つてくれた方ですか？それなら、どうして私のアドレスを知つているのですか？杉原ケンジのことも。そして、あなたはなぜ自分をケンジだと言つたのですか？」

「杉原ケンジから、俺のことは聞いていませんか？もう一人のケンジ。」

「聞いていません。」

「だったら、チャンプといふ名前は聞いたことがありますか？」

チャンプ・・・チャンプとは、ケンジの同級生でケンジに最初にサーキュレーションを教えてくれた友達の名前だ。

チャンプという人は本当はケンジというんだ。知らなかつた。みんながチャンプチャンプと呼んでいた。

そして、この私と同じアドレスの人が、まさにそのチャンプ。

そのチャンプが、どうして私のメールアドレスがわかつたのか？

「チャンプさんという名前は聞いたことがあります。チャンプさんがあの時、駅のホームで落し物を拾つてくれた方なのですか？それが、どうして私だとわかつたのですか？」

「すみません。ケンジが波乗りをやめたと聞いてずっと気になつていました。とにかく、そんなお話をしたいのですが、今度食事でも行きませんか？いきなりですけど。」

「私はチャンプさんの顔を知りません。そんな顔も知らない人と、どうやって待ち合わせをして食事するというのですか。どこかに、目印に赤い服でも着て立つていろとでもいうのですか？」

「それでは、いけませんか？」

それでは、いけませんかって・・・出会い系サイトのようでは私は嫌だつた。

すると続けてメールが来た。

「大丈夫です。俺が顔を知っていますから。」

そうだった。チャンプは私の顔を知っている。

私は、少し怖い気もしたが、このチャンプという人に、まったく見ず知らずの人でもなさうだというほんの少しの安心と、ケンジのことについて話をしたいというところから、会つてみることにした。私のアドレスをどのようにして知つたのかも知りたかった。

それと、思い込みとはちょっと違うけれども、私はチャンプが悪い

人ではなさそうだということだけは、メールのやりとりの中で直感的に感じていた。

「わかりました。土曜日の昼間ならいつでも大丈夫です。」

「了解！では、次の土曜日までに連絡します。あつー言い忘れてました。俺の名前は岡庭ケンジです。」

### 第3話 ケンジとの出会い

私とケンジが知り合ったのは、高校2年の時だ。

私の友達ナオミと、その彼が、私たちを引き合わせた。

「RIEのこと気に入っている人がいるのよ。会つてみない？」と、ナオミが私の顔を覗き込みながら、少し（お願い！）という気持ちが彼女の瞳から感じ取れた。

ちょうど、そのころ、私は見事にサーフチームの先輩への片思いがブレイクしたばかりで、この、なんともいえない敗北感をどう自分でも受け止めていいのか、そして、どう浄化させたらいいのか毎日悶々としていたのだった。

「気に入つたって、いつたいどこで私を見たの？」

「駅……だつて聞いてるけど。」

「駅つて……ホントにそれ、私なの？」

「絶対間違いないよ。日焼けしてて、一人だけ制服に白いソックスはいている子つて言つてたから、RIEしかいないでしょ？」

白いソックスと言われてしまえば、確かに校則違反のソックスをはいているのは、私だけかもしれない。

「そりなんだ……」

興味があるような、ないような。正直なところ別にどうでもよかった。

そんな私の気持ちより、ナオミは頼まれた手前、なんとか私とその

人を会わせようと必死

だった。

「彼もサーフィンをやつているらしいの。一緒にサーフィンに行く  
といふことと、まずは

友達からさあ、会つてみない？」

「サーフィンお見合いツアーですか？」

「まあ、そういうことになるかな。」

「いきなり一人で？いきなりサーフィンに行くよりも、それならま  
ずご飯とかお茶とか、

普通そういう流れじゃない？」

「それがさあ、プロサーファー用指していて、海に行く以外全然街  
に出たりしないらしい  
の。そんなお金使うくらいなら、一回でも多く海に行つたほうがい  
いって。」

私は、勝手に無口でぶつきらぼうな人を想像していた。

「で、そんなに遊んだり出かけたりしない人が、私を気に入つたつ  
て、どうやって会つた

り遊んだりすればいいわけ？デートは毎回海ですか？」

私は、少し呆れ気味に聞いた。本当に、そんな彼が私を気に入つた  
などと言うのだろうか。

そして、気に入ったからどうというのだろう？

「サーフィンおたくなのよ。かつこいいんだけど、サーフィンに異  
常に執着していく、

いい人らしいんだけど、ちょっと近寄りがたいんだって。彼女がで  
きたら変わるんじゃ

ないかって彼が言うのよ・・・

「それで、私に？それって私は爆弾処理班ってこと？」

「そういうつもりはないけど、そうなっちゃつかなあ？でもね、彼  
がRIEのことを気に

入つてゐるっていうのはホントみたい。」

「じゃあ、一回お茶だけしてみるわ！あとは、どうなつても知らな  
いから！」

そして、ナオミとナオミの彼と私とそのサーファーの彼との4人で、  
渋谷の公園通りにある  
喫茶店で会うことになった。

「はじめまして。R I Eです。」

私は微笑みながら、軽く頭を下げた。

「はじめまして。杉原ケンジです。」

これが、私とケンジとの出会いだつた。

彼は、私の想像していた人とは全然違い、一見ハーフかと思わせる  
ような顔立ちをしていた。

普通にかつこいいと言われるであろう整ったルックス。少しブラウ  
ンがかつた目が彼の日焼  
けしている肌を余計に際立たせた。しかし、中身はというと、ナオ  
ミから聞いていた通りの

よく言えば個性的、悪く言えば・・・相当変わっている人だつた。

「俺と付き合いたいの？」

ずっと私たち三人の会話に入つてこないで、いきなり口を開いたと  
思えばこんなことを口走つた。私たち三人は思わず顔を見合わせて  
しまつた。あまりにいきなりの言葉だった上に、まるで私が彼と付  
き合いたいみたいな方向に話が進んでいく。

「おい！ケンジ！いきなりそれはないだろ？」「

ナオミの彼が場を和ませるように、笑いながら話を変えようとした。  
「付き合いたって言つたら付き合つてくれるの？」

ナオミの彼の気遣いも無視して、私は彼に聞いた。ナオミとナオミ  
の彼は、少し（まづいな）

という顔をしながらも、こちらを見守つていた。

「条件がある。」

いつたいこの人はなんてことを言つただろう？気に入ったと言つて

きたのは彼のほうだ。それ

なのに、自分と付き合いたいのかと私に聞いてきて、おまけに付き合いたいなら条件があるだ

なんて、いつたいどれだけ高飛車な人なのだろう？最初に聞いたちよつと近寄りがたいといふ

意味がすごくわかつた気がした。

「条件？なにそれ？」

私も、少し無礼なこの初対面の人と同じように少し無礼気味な言い方で返した。

「校則を守らないヤツは嫌い！」

「えつ？」

私は、ナオミとナオミの彼のほつを見て（なんなの？この人？）という顔をした。

「そんなに目立ちたいの？」

「えつ？」

「キミさあ、あの子ならすぐヤラせてくれそつて、いろんな男子から言われているの知つてる？」

「えつ？なにそれ？」

「自分のことつて自分がいちばんわかっていないものなんだよね。きっと俺もそう。だけど、

キミには誰もそんなこと言わないでしょ。それを言つてあげられるのは俺しかいないって思つてたから。」

「それって、大きなお世話だよつて言つたら？」

「俺は、他人から、ヤラしてくれそつだから付き合つたつて言われたくないからさ。だから、俺と付き合つんであれば制服くらい普通に着たら？一緒にいても目立つてしまつがないよ！」

自分だつて、しゃべらなければ、ものすごく軽そうで、遊んでそんな感じに見えるよ・・・と言いたかつたけれど、彼の言つとおり、自分のことつて自分がいちばんわかっていないだろうから、きっと彼も私に言われても（そんなことはない）つて思うだけだと思つて

やめた。

この時点で、私は彼に少し興味を持つていた。確かに、今まで出会ったことがないタイプ。

校則を守って普通にしている私というのを、初めて想像してみた。でも、想像できない。未知の世界。そして、私はその想像できない私の姿というのを見てみたくなってしまったのだ。

「制服、普通に戻してみようかな・・・」

その言葉に驚いたのはナオミとナオミの彼だった。それは、私が普通に目立たない女子高生になるかもという驚きではなく、（付き合つんだ！）といつことへの驚きだった。

「とにかく、また会おうか？」

「そうだね。」

これだけだった。付き合つとか、よろしくお願ひしますとか、そんな言葉もなく、また会おうか？ そうだねで、私とケンジは始まった。

付き合つてからも、「私たちって・・・どういう関係？」みたいな話は一切なかつた。そして、別れる時も。まさか、この日から私とケンジは15年間も一緒にいるなんて誰が想像しただろう。なんの音もたてずに風が通り抜けていくように、私とケンジはふたりになつて、そして、何も言わずに別れた。

今、考えれば、私はケンジに慣れすぎて、ケンジの本当のやさしさに甘えていたのだと思う。そのために、ケンジのことを思いやる気持ちを、長年付き合つていくうちにすっかり忘れてしまつっていた。最後は、ケンジのわがままに付き合いきれなくなつて別れたが、あれは、わがままではなく、ケンジが抱いていた孤独を私が分け合えなかつただけなのだ。

人は誰でも孤独だ。それも、ひとりでいるときより、誰かと一緒にいるときのほうが孤独を感じる。ふたりでいても、どうしてもひとつにはなれない。当たり前のだけれど、ひとりでいるときよりも、

ふたりでいるときの方が、決してひとつにはなれないもどかしさを感じてしまうものだ。ケンジは今どうしているだろう。幸せに暮らしているなら、それでいい。少し嫉妬してしまうけれど。私は、ケンジに何も気持ちを伝えずに黙つてケンジの前から姿を消した。いまさら、気持ちを伝えることなどできないし、伝えたところで、どうにかなるわけでもない。でも、元気にしているということだけは知りたかった。元気でいてくれればいい。そんな

思いが、私にケンジへ匿名のメールを送らせたのだった。

そして、付き合っている間、いつもケンジは自分に波乗りを教えてくれていた人の話をしてくれた。あの性格からか、波乗りばかりをやっていたせいか、あんまり友達らしい友達がいなかつたケンジが唯一心を許せた友達だったのだろう。そして、ケンジはサーフィン雑誌を買ったびに、いつも後ろのほうのページの大会での表彰コーナーで、彼の名前を探していた。

「また出てるよ～！すげ～なあ・・・チャンプ。アイツだけは、本当に普段になっちゃうかも  
しれないなあ・・・」

チャンプが載つているたびに、いつも田を細めながら表彰のページを眺めていた。

「どれ？チャンプって？写真は載つてないの？」私は聞いた。  
「載つてるよ。ほら！」

そう言ってケンジが見せてくれたページは、表彰台の上でウエットスーツのまま片手に持つたトロフィーを持ち上げている田に焼けた笑顔と、ライディングの写真だった。

表彰台の笑顔は、肌の色が黒すぎて顔が判別できない。ライディングの写真も横顔だった。そして、写真のうえには、「優勝・チャンプ」といつも書いてあって、私はチャンプもケンジといつ名前だったなんて知る由もなかつた。

「言ひ忘れてました。俺の名前は岡庭ケンジです。」

チャンプからこのメールをもらつて私がどんなに驚いたことか。

岡庭憲一「プロ・・・ケンジの唯一の心を許せた親友が、私とケンジが別れてからのこの10年近い時の一いちだにプロサーファーになつていた。それも、今や日本を代表するトッププロ。世界選手権にも出場している数少ない日本のトッププロだ。彼のライディングは、芸術の域に達しているといつても大げさではないだろう。実際、彼がシリーズで出している「岡庭憲一のサーフィン紀行DVD」は予約していないと購入できないほどの人気ぶりだ。

そして、岡庭憲一といえば、「ALWAYS WIDE OPEN」。岡庭憲一の、どのDVDにもその言葉が

パッケージに記されてあつた。

私が好きなのは「サーフィン紀行」HAWAII編」「そこには「ALWAYS WIDE OPEN HAWAII NALU」というサブタイトルがついていた。私は、その言葉を自分のメールアドレスに使つたのだった。そして、その本人のメールアドレスも同じ。それだけだったら何の不思議もないが、どうして、そのアドレスの主が私だとわかつたのかが不思議だった。

そして金曜日の夜、1件のメールが受信された。

岡庭憲一からだつた。

「チャンプです！明日の夜6時半に、渋谷のモツ鍋の店を予約しました。大丈夫ですか？」

私もチャンプからのメールを待つていた。やつと明日会える。そして、どうして私のメールアドレスがわかつたのかやつと聞ける。そしてケンジのことについても。

「大丈夫です。場所がよくわからないのですが、どこに行けばいいですか？」

「ハチ公の前はどうですか？人が多すぎてイヤかなあ？」

「わかりました。あの・・・私、赤い服を着ていつたほうがいいで

すか？（笑）」

「ハチ公にまたがつて待つててくれればわかります（笑）」

私は、メールを見て思わず笑ってしまった。

チャンプが岡庭憲一だとわかつた以上、もう私もチャンプの顔を知つていてる。

私が「冗談で、赤い服と言つたら、彼もハチ公にまたがつてなどと「冗談で返してきた。

そのおもしろさが、「やさしさ」という言葉に形を変えて、私の心の中に入ってきた。

（ケンジには、こんなにユーモアがあつてやさしい友達がいたんだね・・・）

そつ思ひうと、なんだか私も幸せな気分になつて眠りについた。

## 第4話 永遠に言えない・・・

私は、岡庭憲二に土曜日の昼間なら空いていると返事をしたのは、日曜日に海に行くために

土曜日はなるべく出かけないようになると、波乗りを始めてから週刊してからだつた。

結局、憲二が予約を取った店が夕方からだつたということもあって、私は土曜の夕方という

いちばん混んでいるであろう時間に、渋谷のハチ公前で憲二と待ち合わせすることになった。

「R.I.Eさんですよね。」

そう言って声をかけてきた憲二は、DVDやサーフィン雑誌で見たとおりのさわやかな感じのする人だつた。

「はじめまして。あの、こんなに人が多い場所に出没したりして大丈夫なんですか？」

私は、憲二を、岡庭憲二という一人の有名なプロサーファーとして気づかつた。

「大丈夫ですよ。サーフィンの世界では顔が売れているかもしれないんですけど、そうじゃない人たちにとっては、ただのオッサン・・・いや、お兄さんですから。

「そんなもんなんですかね。」

この笑顔。そして声のトーン。そして、人なつっこい雰囲気。この人のことを第一印象で、感じ悪いと思う人はいないだろ？。自分から、あまり人に話しかけていかないケンジが、きっとこの人には気を使わないで話かけられたのかもしれないと確信した。

「あの、敬語はやめません?って言しながら、こんな聞き方したらおかしいですよね。」

「やうですね。・・・なんてお返事してもおかしいですよね。」

「そう言いながら、一人は憲一が予約したモツ鍋屋へと向かった。

憲一が予約したお店は、若くてイキのいいお兄ちゃんたちが元気よく楽しそうに接客をして

いる店だった。どの従業員も仕事が楽しくて仕方のない様子。居心地もいい。そして、私たちは個室へと案内された。

「早速だけど、こちばん聞きたい」とはメールアドレスのことだよね。

いきなり真面目な顔をして本題に入った憲一に、私は少し驚きながらも、憲一の誠実さを感じずにはいられなかつた。

「はい。あっ!でも、今はどいつもいって言つたら嘘になるナビ、私のメールアドレスだと知つてメールをくれたんでしょう?」「もちろんそうだけど。」

「それより、ケンジとは、最近も会つているんですか?ケンジが波乗りをやめたところを

知つていたから・・・」

「今は、もう会つてないよ・・・」

そう言つて、憲一は少し顔を曇らせた。そして、

「何から話さなければいけないかな・・・」と言つて憲一はじばりく黙つていた。

私は、なんとかしてこの沈黙を破らないといけないとこう気持ちになつた。

「なんでもいいです。つていうか、何を言われてもいいつて言つたのだから。私が聞きたい」とを言つたため、憲一はわざわざ時間を作ってくれたのだから。

「なんでもいいです。つていうか、何を言われてもいいつて言つたのだから。

「なんでもいいです。つていうか、何を言われてもいいつて言つたのだから。

「ほうが正しいかな。」

「それなら、高校生のころから今までの話をしようか……」

「そう言って、憲一はゆっくりと話はじめた。

「まず、下北のホームに落としたキー・ホルダーのことだけど……」

「そこまでさかのぼるんだあ！」

あの時、一瞬のあいだにホームに降りてキー・ホルダーを拾ってくれた人が今、目の前にいる。

きっと、こういう運命だったのだ。あの男子学生ともいつか出会える運命。

「あれはね、俺がケンジにハワイのおみやげに買ってきたものなんだよ。」

「ふたつですよね。ケンジからおそろいでつて渡されたから。」

「そう。ひとつあげたら、彼女ができるって言つから、じゃあ俺のあげるよつてふたつ渡した。だから、あのとき下北の駅のホームで君を見つけたというより、俺は学生カバンについているキー・ホルダーを見つけたんだ。そしたら、誰かとぶつかってキー・ホルダーが落ちたじやない。自分のものが落ちたような気分になつて、気がついたらホームに降りて拾つてた。」

「そうだったんだあ。」

「それで、拾つたあと、これがケンジの彼女だつてわかつたわけ。「でも、キー・ホルダーなんていくらでもあるでしょ？」

「普通はね。でもあれは特別。ハワイのハレイワのショッピングで特別に作つてもらつたものだから・・・ ALWAYS WIDE OPENって書いてあつたの気づいてた？」

「全然気づかなかつた。」

「俺がいちばん大事にしている言葉。いつも全開つていう意味。」

「それを、ケンジにおみやげにくれたんだあ。二人のケンジのものだつたのにね。なんだか私がもらっちゃつて悪かつたかも。」

「いいよ！いいよ！俺だって、あのケンジにまさか彼女ができるなんて思つていなかつたし、彼女できたんだつて言つてたケンジが、

あまりにもうれしそうだったしね。」

「それで、キー ホルダーから私が彼女だつてわかつたと・・・」

「そう！それとね、君、1ヶ月くらい前に下北のハチベイっていう居酒屋にいなかつた？」

ハチベイも、このモツ鍋屋と同様、店内は活気でちょっとうるさいんだけど、従業員がすごくよくて、私がよく使っている店だつた。「最近は、飲みにいくなら、ハチベイつて決まつてるけど。もしかして、いたの？」

「うん。すぐそばの席で友達と飲んでた。」

「それで、どうして私がわかつた？」

「だつて、高校生のころから顔変わつてないから。」

私は返事に困つたけれど、おかしくて笑つた。顔が変わらないからすぐわかるつてよく言われる言葉だつた。すると、憲一は、

「そのとき、余計なこと聞いちやつたんだよね。つて言うか、あんなに大きな声で話しているんだもん、俺じゃなくても聞こえちゃうよ。」

「そんなに大きな声で話してた？」

「うん。大きな声で、アドレス変えちゃつたの～！岡庭憲一のDVDのタイトルからパクつて英語とハワイ語ミックスさせちゃつたつて言つてたよ。それで、たまにだけケンジにメールしてるので、これ内緒ねつて言つてたよ。」

そうかもしれない。いや、そうだ。間違いない。私は、ハチベイでそんなことを言いながら、友達に新しいメールアドレスを教えていた。

「それで、どうして私にメールを送つてきたの？・・・今だから言うけど、私、私だつてわからないようにケンジにメールを送つてたの。」

「知つてるよ。」

どうして？それなら、ケンジも私からのメールだつてわかつていたのか。私はなんということをしていたのだろう。ケンジはきっと迷

惑だつたにちがいない。ケンジの前から突然いなくなつた私からのメールなんて。

「なんであなたが知つてゐるの? ケンジも知つてゐるの?」

「ケンジは知らない。俺だけ。・・・はい、これ。」

憲二はそいつて携帯電話をテーブルの上に置いた。

「何? これ?」

「ケンジの携帯電話。」

「どうしてあなたが持つてゐるの?」

「・・・・・」

「なんであなたがケンジの携帯電話を持つてゐるの?」

「・・・・・ケンジの遺留品。」

「どういづ」と?

「ケンジ・・・ハワイにいるんだ。一緒に海に入つたまま、帰つてこない・・・・」

「帰つてこないって・・・・」

「そういうこと・・・だから、君だけには伝えたくて俺も日本に帰つてきた。ケンジには、もう俺しかいなかつたのかもしれない。突然ハワイにやつて来て、10年近くブランクあるけど、やっぱり俺の人生にはサーフィンが必要だつて。日本でどこかの海に入つていて君に会うのが嫌だつて。何も言わずに突然いなくなつた君を許せてない自分が、君を忘れられないでいるようで嫌だつて。だから、もう一回、若かつたころみみたいに最初からサーフィン教えてくれつて。」

「それなら、どうして直接言つてくれなかつたんですか? どうして、わざわざ誰だかわからないメールを送つてきたりしたんですか?」

「それは、君がまだケンジに想いがあることを知つちゃつたから・・・」

「私、何も言つてないじゃないですか! 勝手にそんなこと言つて。そんな大事な話なのに、私はずつといたずらメールだと思つて氣味が悪かつたんですよ!」

「じゃあ、なんでケンジの携帯に波乗り情報なんて送つてたの？ケンジとの接点を作りたかったんじゃないの？ケンジを忘れられないんじゃないの？ケンジが君と別れてからどんな想いですつと一人でいたか考えたことはあるの？」

憲二の言ひとおりだつた。

私がケンジの前から突然姿を消したのは、ケンジとは自然消滅に持つていきたかつたけれど、できないとわかつたから逃げただけだつたのだ。あのときも、ハッキリと自分の気持ちを告げるべきだつた。自分は何も傷つかないで逃げた。付き合つてから別れるときつて、振るほうがツライというただそれだけで、私は現実から逃げた。ずるい女だ。6年間も一緒に暮らしていながら。そして、自分が寂しくなると、誰だかわからない一方的なメールを送る。別れてから何年も経つてしているのに。

「俺も、日本に帰つてきて、どうやつて君を探そがと思ったよ。千葉にも湘南にも茨城にも伊豆にも行つた。顔を見ればわかると思つた。まさか、下北でまた会うとはね。それから、ケンジの携帯に俺と同じアドレスのメールが入つたから、すぐ君からだつてわかつたよ。でも、ケンジに未練があるつていうことも知つていたから、どうしても、ケンジのことは会つて話したかった。」

「そうだつたんですか・・・でも、帰つてこないつて、どこかでまだ生きているつていうことも考え方・・・ないですよね。」

私も、サーファーだ。これがどういうことかぐらいはわかる。

私は泣かなかつた。現実逃避ではなく、信じられないというのもなく、ただ、ケンジに会わなければ、いや、ケンジがいなくなつた海に行かなれば何も終わらないと思つたからだ。泣くのは、すべてが終わつてからでいい。私の想いとケンジの想いが浄化されたときにつと泣けるのだと思つた。

ハワイに行こう。ケンジがいなくなつた場所に。会社も辞めよう。すべてを捨ててケンジと向き合わないと何も解決されないような気がした。

私は、すぐにでも会社に退職願いを出して、荷物をまとめてハワイに行こうと決めた。

そして、ケンジの帰りを待とうと思つた。たとえ、その日が永遠に来ないとしても。ケンジが帰つてくるまで私は待つ。それが、私のケンジにできるたつたひとつのことのような気がした。今度、もしケンジに会えたなら、ハツキリと伝えよう。別れてからもずっとケンジを想つていたこと。そして、別れたことを後悔していること。それを、永遠に言えなくても・・・

「ハワイに連れてつてください。」

私は憲一にそうお願いしていた。

「いいよ。一緒にケンジが帰つてくるのを待つ？」

「そうしていただければ・・・心強いです。一人だったら耐えられないかも。」

「ケンジの前でも、そりやつていればよかつたのにね。アイツはいつも一人で頑張つて、俺のことを全然頼らないって言つてたから。それが、余計ケンジに男としての自信をなくさせてたかもしれないね。」

憲一の言葉は、私の胸のあたりから、すう～っとお腹のあたりまで暖かいなにかが流れしていくようだつた。

「出発の日は君に任せよ。俺はプロサーファーだけれど、それだけじゃ食べていけないから別の仕事もやつてる。世界中どこでもできる仕事。だから、俺のことは気にしないで、君もそれまでいろいろ大変だろうから、しっかり準備して！」

「わかりました。じゃあ、ケンジが帰つてくるまで、私のこと、よろしくお願ひします。」

そういうつて、私は頭を下げた。誰かに頼つて生きていく・・・今まで考えたこともなかつたけれど、そんなに悪いものでもないかもしない。頼りきつて生きていいくのは、どうかと思うけれど、一人で冷たい海に入つていくより、そつと差し伸べられたボートと一緒に

乗つてみるのもいいかもしない。

私は、ケンジがなにも差し伸べてくれていないと思つていたけれど、もしかしたら、ケンジの差し伸べてくれたボートに気づかなかつただけなのか、それとも、それを見る事ができる心の眼を持ち合わせていなかつたのかもしない。

16歳のあのとき、駅のホームで憲一が拾つてくれたキー ホルダー。そして、あれから20年ほどたつた今、また憲一が私の大事なものを拾い集めてくれた。

これから、ハワイに行くことというのは、私がいちばん聞きたくないことを聞くかもしない。それと、いちばん見たくないものを見ることになるかもしない。

それでも、この憲一の渴きのない溢れ出るやさしい笑顔があればなんだか乗り越えていけそうな気がする。そして、人間として少し大きくなれそうな気もしていた。

私は、次の日には海には行かず、いらないと思われる部屋の荷物を捨てて、生きていくための最小限のものだけを残した。そして、退職願いを書いた。

## 最終話 24th Summer Breeze

ノースショアへ向かうフリーウェイを下りて、道なりにまっすぐ走つていくと、海へと続く道に出る。その脇にはずっと、だだつ広いパイナップル畑が広がっていた。

丘の頂上まで行くと、遙か向こうに海が見える。空と海の色が溶け合つのような青が広がり、太陽の光りが波に反射する・・・ノースショアの海だ。

昔観たサーフィン映画の場面を思い出させた。

憲一の白いアメ車が、もうすぐ40歳だというのに、日焼けして、ビキニの上にタンクトップ一枚という格好の私を乗せて、パイナップル畑の真ん中の道を通り過ぎる。

「ケンジ、私も来ちゃった。」  
私は、声に出して言つてみた。

10年ぶりに、ケンジに話かけた。それが、なんだかとつてもうれしくなつたけれど、余計に話しかけた相手がないことが私を必要以上に虚しくさせて、泣きたくなつた。

ケンジが帰つてこなくなつてから1ヶ月。

ノースショアの風は、私の震える唇をさらりと揺さぶるよう、私の顔をめがけて吹いていた。

ハレイワで右に曲がつて、憲一の車はそのまま海沿いへと入つてつた。

秋のノースショアは、日本の波とは比べものにならないくらいの大ささだった。

ざつと、人が三人、縦に積み上げられたくらいの高さはあるだろう。

「ケンジ、どうしてもここに来たかったんだ。」私は、また相手のいない会話を声に出した。横で憲一が聞いているとか、そんなことはどうでもよかつた。

さんざん、ケンジに話しかけていたあと、私はここへ来てはじめて憲一に話かけた。

「ねえ～、演歌っぽいけど、なんだか漁師や船乗りの奥さんの気持ちがわかつた感じ。」

「何それ？おもしろいこと言つねえ～。」

「憲一は波乗りしているときって何を考えてる？」

「波のことだよ・・・なんで？」

「そうだよね。私もそうだった。でも、今は違う。淋しかったり、余計な悪い心配しちゃいそうな気がする。ホントは、最初からこんな気持ちだったらよかつたのにね。」

「そうか・・・サーファーの彼氏を持った女の子ってそんな気持ちだつたのか。」

「私にもわからなかつたけど。自分も一緒になつて海に入つていたから。でもさあ、漁師なら

まだいいよね。魚を獲つてくるでしょう？ケンジなんか、何も獲つて帰つてこなかつた。憲一も同じか！でも、ケンジなんか何も獲つてこないどころか、ケンジが帰つてこなくなつちゃつたんだから、本当に最悪。」

「ケンジがなんで波乗りをやめたか知つてる？」

「知るわけないじゃない！」

「言つてたよ。やつと大人になれるつて。自分は波をおりることでしか大人になれないつて。だから、RIEばかり大人になつて自分はずつと停滞してたつて。それをRIEが気づかせてくれたつて。」

「ケンジにも、私に言えなかつたことがあつたんだ。お互いそんなことだけだつたんだね。」

私は、そんな気持ちでさえも、ケンジと分かち合えなかつたことが

とてもくやしかつた。

「ねえ、RIEさあ、オシドリ夫婦って言葉知ってるよね。」

「知ってるけど、どうこの意味なのか本当のところはよくわからない。」

「オシドリって、オスがものすごく派手で、メスがものすごく地味なんだよ。なんでだかわかる？」

「さあ・・・」

「オスがね、敵からメスを守るために、先に自分が目立つように派手にできているんだって。」

「それがどうかしたの？」

「ケンジが言つてた。彼女派手派手しくて嫌になるつて。目立つてしょうがないつて。きっとRIEを守りたかったんだね。ケンジからその話を聞いて、すぐにオシドリを思い出したよ。」

ケンジは、私に「言わなくともわかるだる」が口癖だった。私は、言わなきやわからないよつていつも言つていたけど、ケンジが本当に言いたいことを汲み取つてあげられなかつたんだなあと、いまさらわかつた。

「ねえ、ケンジ帰つてくるかなあ。私、観光で来ているから長くても3ヶ月しかいられないよ。それまでに、帰つてくるかなあ。」

こんなことを言いながら、私は悪い予感を頭の中から拭えずにいた。渋谷のモツ鍋屋で憲一から初めて話を聞いてからとこつもの、ずっと心中では悪い予感が、水面に石を投げたときにできる波紋のように、ずつと広がつたままだった。

「じゃあ、俺の仕事手伝つ？」

「なんの仕事？」

「世界中どこにいてもできる仕事。それでいて人に喜ばれる仕事。」

「これがあるから、俺も世界中の海で波乗りができる。」

「そんな仕事、やらない人つているの？」

「そりゃあ、いるよ。せぬやうなこじやなくて、わかるかわからなかつていう仕事だから。」

「私はやりそう? じゃなかつた。わかりそう?」

「どうだらうね。でも、おもしろいかもよ。」

「でも、まだ3ヶ用あるし。それまでにケンジが帰つてこなかつたら、考える。」

「こつでもここよ。やりたくなつたときに始めればいいから。」

それから、1週間もたたないうちに、ポイントから何キロも離れた岩場に、ケンジのサーフボードが、リーシュコードだけが切れて打ち上げられた。

持ち主のいなくなつたサーフボードに、憲一の知り合いのハレイワのショップのオーナーが、赤いアンセリウムの花を供えてくれた。私は、その一部始終をまるで他人ごとのようにながめていた。その日は11月のノースにしては珍しく波の音が静かだつた。

「もう、ここにこむ意味なくなつちやつたね。」

私は憲一に言つた。

「そつかなあ? 世界中どこにいてもできる仕事の話、まだ返事もらつてないよ。あと、まだ、RHEの波乗りの腕も見せてもらつてない。」

「そんないしたるものじゃないよ。下手の横好きつてやつ。」

「それと・・・いい加減泣いちやえば? 泣かないとね、浄化されないんだよ。涙はね、心の中の嫌なことをすべて流してくれるから。」

私は、サンセットビーチに向かつた。

ブルーのようなエメラルドのよつな、こつこつブルーをなんと呼ぶのだろう。

どこまでも続いている海岸線。いたるところで波が白くブレイクしている。

ケンジは、この波にもまれながら、何を思つてゐたのだろう。最後に誰の名前を呼びたかったのだろう。そんなことを考えながら、私はひとりで砂浜に座り込んで泣いた。砂をつかみながら大声で泣いた。もっと、やさしくすればよかつた。もしも、今、ケンジがこの海で大ケガをして、起きることさえできなくなつたとしても、私はケンジとずっと一緒にいただらう。

「今日は波が静かだよ」とか「今日はいつもより太陽がまぶしいよ」なんて言いながら、毎日をケンジと一緒に生きてだらう。一生波乗りができなくなつてもいい。季節がずっと冬でもいい。それでもケンジがいれば私はこの人生を楽しみながら生きていけただろう。

「お願いします。誰か私に生きていくための力をください。お願ひします。」

私はそう言つて力の限り祈つた。自分のなかに、まだこんなパワーが残つていたなんてびっくりするくらい。

ケンジとサーフボードを結んでいたリーシュコードは、ビニからも出てくることはなかつた。

けれど、私とケンジが一緒にいたという事実は、決して消えることがない。時がたつて色あせることはあっても、思い出は永遠だ。いくら季節が過ぎていつても、ふたりが一緒にいた時間は永遠に残る。

「また来るね、ケンジ」

私はそういうて、またパインアップル畑の道を、今度は街に向かつて戻つて行つた。

「いろいろお世話になりました。」

憲二にお礼を言つて、私は日本へ帰るための荷造りをした。

「いたいだけいていいよ。次にタヒチに行くけど、一緒に行く?」

私は気づかつてか、憲二はいつもやさしい言葉をかけてくれる。

「大丈夫だよ。ここには、あまりにケンジに近すぎて寂しそぎるから。」

・

本当にそうだった。あんなに憧れていたノースショアを見るのも、今の私には苦しさが伴う。

また、つらくなったら、ここへ来ればいい。ケンジは、もうずっとここにいるのだから。淋しくなったら、ケンジのいる海に抱かれに来る。そして、これから人生を頑張って、私も最後はケンジの海に帰つてこようと思う。

「ケンジが言つてた。いなくなる日の前の晩。この先、自分に何かあつたときには、R I E のことを探してくれつて。それで、R I E の力になつてやつて欲しいつて。自分もずっと俺に世話になりっぱなしだつたけどつて。だから、探したんだけどな・・・」

そう言つて憲一は笑つた。久しぶりに見たプロサーファー岡庭憲一のさわやかな笑顔だつた。

「ケンジは自分がもしかしたらいなくななるかもつて、わかつていたのかな?」

「そんなことは、ないだろうけどね。」

「そつか。じゃあ、迷惑じやなければ、いられる間だけ、ここにいさせてもらおうかな。」

「まだ時間がたっぷりあるから、ゆっくり考えな。」

「ありがとう。そうする・・・」

「日本に帰る日、もし、ダブルレインボーが空に架かつたら、人生を俺に甘えてみるつてのはどう?」

「それつて、どのくらいの確率の賭け?」

「自然相手だからねえ・・・0か100つてどこじゃない?」

「そんなんで、人生決めちやつていいの?」

「その虹、きっとケンジが架けるよ。架からなかつたら、R I E は大丈夫。一人で生きていいける。もし、架かつたら、ケンジがR I E をよろしくつてことだと俺は思う。」

そして、日本へ帰る日。

ホノルル空港へ向かう車の中から、私と憲一はダブルレインボーを見た。

これから、どうやって生きていこう。

憲一は別に何も考えずにただ毎日を楽しく過ごせればいいんじゃないと、またさわやかな笑顔で言っている。

そして、憲一と一緒になら、本当に毎日をただ楽しく過ごせそうな気がしてくるから不思議だ。

このダブルレインボーはケンジが架けたの？

私がどうやって生きていけばいいかの答えをケンジが出してくれたの？

ケンジのことを見なくしてしまったから、いいことだけを思い出すのかな？

こんなことをしていると、また本当に大切なを見逃してしまつつかな？

「さて、ダブルレインボーだね。決まったね。ケンジが架けたんだね。ケンジがRIEを、ここに残したがっているね。」

「そうかな？私はただ憲一に迷惑かけたくないだけなんだけれど・・・」

「俺は、ケンジが落としたものを拾う役割みたいなものかもね。」

「落としたものを拾う？私、ケンジに落とされたわけ？」

そう言って、二人は久しぶりに笑った。

もうすぐまた夏が来る。

駅のホームで憲一にキー ホルダーを拾つてもうつてから、24回目の夏が来るのがだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3600d/>

---

24th Summer Breeze

2010年10月21日06時08分発行